2024年度 第20期

小児在宅ケアコーディネーター研修修了生の学び

- こどもたちがどうしたいのかを考え、こどもや家族と対話しながら必要なケアを考えて行くことが大切であることを学んだ。
- 医療者の立場での意見に賛同してしまうところが多く、患者や家族が主体に考えるということが不足していたことに気がつきました。
- 患者や家族が大事にしていることをキャッチして医療者と共有し、一旦考える時間を設ける事が大切だと思いました。
- インフォームドコンセントを行うとき、医療者が一方的に話を進めてしまっていることが多かったことに気が付きました。その後の患者や家族の反応、思いなどを改めて確認して、安心して療養、生活の出来る場の提供を一緒に話していきたいと研修を受けて感じました。
- こども家族を中心に（こども家族の思いが置き去りにならないように）語りを通して常にそばにいて一緒に考えることの大切さを学びました。
- 医療者は患者にレッテルを貼ってしまう傾向にありますが、患者が発する言葉の真意を汲み取ろうとする姿勢が大切であることに気がつきました。また、その姿勢は自ずと患者にも伝わり、患者の思いを引き出す可能性にもつながるということを学びました。
- こどもや家族が主体となるような支援をするためには、聞くこと、待つことが大切で、普段からのコミュニケーションや気づきの感性が重要であることを学びました。
- 意思決定をするための支援についても答えを出すことばかりでなく、それぞれの立場や思いに気づくことや、それらを表出するきっかけをつくることが看護職としての役割であり、コーディネーターの役割として必要なことだと感じた。
- こどもと家族が主体となってどうありたいのか、それを尋ねて一緒に見守り、また一緒に育っていくことが大事なのだと改めて学ぶことができた。
- 日常の勤務の中でどのくらい自分がそうであれたのかを振り返り、医療主体でこうあってほしいと考えてしまう部分もかなりあったと気づくことが出来ました。
- 自分の看護に自信がありませんでしたが、研修に参加して、私は患者さん、家族のことを考えて看護をしているのかもと、思えました。毎回、参加するたびに自分の看護を振り返り、初心に戻って考える機会となりました。
- 今までの自己決定をすることが難しいこどもに関しては、家族の意向で治療やケアを進めてきました。しかし、今回の研修を通し、自己決定が難しい子どもであっても、どうしたいかという意見やふとした発言を汲み取り、こどもの意見を家族と共有し、ケアを見つめ直すことの大事さを学びました。自分自身が、看護を行う上で後ろを振り返る余裕がなく、突っ走っていたことを、今回の研修で痛感しました。
- 様々な場所で、自分と同じように、こどもとその家族に向き合っておられる看護師の方々やその他の職種の方がおられることに改めて実感し、仲間がいる気がして嬉しく思った。こどもらしく、

その家族らしく生きるには、どの様に支え、寄り添ったらよいのかについては、正解がなく、苦悩する事も多い。しかし、こどもとその家族の相互作用が機能できるように、寄り添い続け、看護師としてかかわっていくことが必要であると感じた。こどもだけでなく、家族全体を捉えて、思いを共に理解する事が重要であると感じた。

- 今まで患者への最善について考えて看護していたつもりだったけれど、いつしか医療者の考えの割合が大きくなってしまう看護になっていたように、今回の研修で気付かされました。「患者さん、家族にとっての最善とはなにか患者の立場に立って寄り添った看護」とよく言葉では言っていたけれど実際はいろんなジレンマをかかえて難しいことをいろんな方の事例からも実感しましたが、寄り添った看護とはなにか具体的に学ぶ機会にもなったので、今後は立ち止まって考えて、いつでも患者、家族の思いを汲み取れる看護師でいたいと今回の研修に参加し強く思いました。
- 医療者視点になるのではなくこどもやご家族の視点にたって考えていくことの大切さを学びました。こちらがどうしてあげたいかだけではなく、こどもとご家族が主体となった生活を継続して支えていくためにできることを探していこうと感じることができました。
- こどもと家族が主体であるということをわかっているつもりでいたが、実際にはこどもの気持ちがどうかということを考えることができていないことがあったと気づきました。
- 医療ケア児のご家族の講演では、ご家族の思いを具体的に知ることができる貴重な機会でした。